

## 【企画概要】

作品名	「風雪の太陽」(仮)
形式	劇場公開実写映画
製作予算	30.000 万円予定
撮影期間	2018 年 9 月～2019 年 3 月 (延べ 6 ヶ月) 予定
製作会社	株式会社素浪人
監督	未定 浜本正機 (あかね空 07)
脚本	未定 奥寺佐渡子 (八日目の蟬 11) 高山由紀子 (遠野物語 82)
音楽	未定 星勝 (ペコロスの母に会いに行く 13) 富貴晴美 (日本のいちばん長い日 15)
主題歌	未定 小椋佳、中島みゆき、森山直太郎
公開時期	2020 年秋以降予定
公開予定	日本国内、海外など
メインターゲット	日本国内の団塊世代及び歴史小説を好む中高年男女及び大河ドラマを視聴するシニア層。宮城県、岩手県所縁の人々。
サブターゲット	全国学校などの教育機関、女性活動支援団体、親鸞所縁の人々

『風雪の太陽』主な登場人物

- 慶念** 木材伐採を生業とする豪農の次男として生まれた。本名は長兵衛。間引きの子の養育と人民救済に生涯を捧げる。慈愛に溢れ、多くの苦難を不屈の意志で乗り越え101人の幼子の命と多くの民衆を救った。
- およう** 慶念の妻「何年でもお待ちします」おようの覚悟の一言は、長兵衛の人生を支えることになる。死の間際に27年ぶり慶念に再会。
- 門間大蔵** 二豪村の大農家 敬虔な慶念の信奉者。慶念の阿弥陀堂と布教のためにその田畑の殆どを費やす。(阿弥陀堂の三傑)
- 鎌田権右衛門** 家畜商の資産家 門間大蔵から慶念の話を知り、慶念に興味を持つ。経済的に慶念を支える。(阿弥陀堂の三傑)
- 西尾清五郎** 中央の政治や軍事に関心を持ち、常に天下国家を上から目線で語る。妻きみは心の中でチャボがニワトリと肩を並べて!と笑っている。世事に長けているので、慶念の事を心配している。(阿弥陀堂の三傑)
- 西尾 きみ** 西尾清五郎の妻、慶念の子育てに、女たちのネットワークを作り協力する。
- 佐々岡幸右衛門** 和多田沼の豪農 慶念が最初に育てた間引きの子 孟を養子にした。慶念を経済的に支える。
- おつや** 門間大蔵の娘。阿弥陀堂で子供たちの面倒を見る。ひそかに慶念を慕っている。
- 耕介・真教** 黒岡村の大農・阿部文右衛門の次男耕介、小児麻痺で片足が不自由。幼い時から蝦夷穴で間引きの子たちと過ごし、慶念を尊敬し続けて弟子となる。年上のおつやを慕っている。
- 安部文右衛門** 黒岡村の大農 真教の父 慶念が最期を迎える屋敷の主。
- 留吉** 自身の解釈で盗品をお布施する心やさしき元与太者の漁師。

## イメージキャスト

慶念 (17-52)	内野聖陽
およう (21-48)	夏川結衣
門間 大蔵 (31-54)	瑛太、妻夫木聡
鎌田権右衛門 (31-54)	濱田岳、波岡一喜
西尾清五郎 (31-54)	桐谷健太
西尾 きみ (29-52)	西田尚美
佐々岡幸右衛門 (45)	ユースケ・サンタマリア
おつや (7/17-23)	オーディション / 桐谷美玲
耕介・真教 (4/14-19)	オーディション / 千葉雄大、本郷奏多
安部文右衛門 (37-60)	北大路欣也、宇崎竜童
留吉 (30)	オーディション

～幕末の混乱期に多くの民衆を救った慈悲の父慶念坊～

生誕200年記念映画

## 映画『風雪の太陽』

あらすじ

199x年x月昼下がり。爽やかな風が吹く田園風景。傍らには可憐な蓮華の花が揺れている。彼方には、穏やかな野蒜の海が広がっている。

寺院の本堂に埃をかぶった古い書物を取り巻く人々。慶念坊に関する書物である。住職が埃を払いその内容を読み始める。

X

X

X

ホイト坊主と呼ばれる慶念は、間引かれた嬰兒の死骸を見ては、人々が救われていない現実にはやるせないものを感じていた。黒岡村にある蝦夷穴という横穴にこもって十日余り、阿弥陀仏の呼びかけを聴いた慶念は、一つの決意をした。阿弥陀仏の呼びかけは、「捨てられていく嬰兒たちに手をさしのべよ」というものであった。そしてその決意とは、生まれ故郷でも目にしてきた間引かれて捨てられる嬰兒たちを育てようというものであった。

ひたすら弥陀の誓いを信じて来た長兵衛(慶念)だが、飢えや病にあえぐ人々、民を忘れた政治、その現実を前にして行き詰まっていた。生まれ故郷を捨て、妻を捨てた。そして親鸞の歩んだ道をたどることで、親鸞の心に触れたいと思ってきた。それもならぬまま、憔悴した心で生まれ故郷に、妻のもとに帰ろうとしてたどり着いたのが、涌谷であった。

畑仕事のままに、働く人々に、親鸞の教えを説いて回りながら、子どもが生まれそうな家では「間引きをしないように。産んで育てるように」と声をかけていった。教えに耳を傾ける人は次第に生まれていったが、「間引き」の話になると、むしろ迷惑がられ、嫌われることが続いた。

ある日、川に自分の体を沈め、子どもを川の中で産み捨てようとした女性を見つけ、家に連れて帰る。そしてやはり間引きを考えていた夫婦間に生まれた子を、慶念は引き取り、「孟(はじめ)」と名付け、蝦夷穴での過酷な子育てが始まる。自分ひとりの生活も容易ではない中、洞窟と言う劣悪な環境の中での子育てである。人々は「どうとう気が狂ったか」、「ホイト坊主がどこかのおなごに孕ませた子じゃ」、「かつばらってきた子じゃ」などと噂した。

慶念には、孟を懐に抱き、授乳機にある農婦を訪ね歩き、お乳をわけてもらう「乳托鉢」の日々が続いた。

次第に、慶念の存在にも関心を示したり、話を聞く人たちが増えてきた、と同時に、子どもたちにお乳を提供する女性たちも広がり、その女性たちが、新たに女性を連れてくるといった形で、子どもたちを見守る組織が出来あがっていった。

二人目の子どもを貰い受け、「二郎」と名付けた。しかし、九か月を迎える頃、二郎は亡くなった。「間引いたのと同じだ」と自分を責めた。三人目の子どもを孟は「じろう」と呼んだ。四人目は、捨て子であった。女の子であったが、孟は、やっぱり「じろう」と思っていた。「お光」と名付けた。

三歳になった孟をもらいたいという夫婦があらわれた。つらい別れであったが、慶念はその夫婦に孟を託した。

慶念の姿に共感する人たちの間で、寺院の建立の話が持ち上がった。慶念は寺院よりも子どもたちが育つ環境をと願った。やがて阿弥陀堂が完成した。支援者たちは自らの資産を少しずつ削りながらも支え続けた。

しかし、時代は決して良くなるまい。相変わらず飢饉と飢えに苦しむ人々に対し、役人は藩の財政困窮のため年貢を増やすことしか頭にはなかった。またしても一揆があちこちで勃発した。そんな中、根拠のないデマをもとに慶念が捕らえられた。慶念は声高に無実を訴えるでもなく、牢獄の中で断食を続けた。慶念を心配する人たちの説得にも耳を貸さない。まさに獄死寸前のところで、藩は、死んでしまうことから起きる面倒を避けるため、慶念に所払を命じ、釈放する。そこへ、おようが連れてこられる。なんとか死を免れたものの、もはや慶念には生きる力が残っていなかった。周りに見守られながら息を引き取っていく。慶念、五十二歳であった。

その後、門間大蔵は僧籍にはいり、西尾清五郎は仙台にて学塾をひらいた。門間つやは、慶念らがなした偉業と傾けた情熱を偲びながら静かに生を全うした。鎌田権右衛門は子孫に、この地方の福祉医療をたくして涌谷に病院を開き、今に引き継がれている。

X X X

雪景色の田園風景。阿弥陀堂跡地に佇む慶念坊の墓。真教、おようの墓も静かに寄り添っている。綺麗に掃き清められたお堂には真新しい花が手向けられ、線香の細い煙が立ち昇っている。傍らに初老の男が手を合わせ、その広場には慶念所縁の多くの人々が静かに祈りを捧げている。彼らの背後には冬の荒々しい野蒜の海が白波を立てて広がり、薄曇りの中、煌々と輝く太陽が、激しくも優しく照らし続けていた。